心理学教育における調査的面接技法の実践について

西　村　太　志*
東亜大学　総合人間・文化学部　心理学研究室
E-mail: taishi@toua-u.ac.jp

内　田　裕　之
東亜大学　総合人間・文化学部　心理学研究室
E-mail: uchida@toua-u.ac.jp

原　　夕　紀
東亜大学　総合人間・文化学部　心理学研究室

＊現所属：広島国際大学心理科学部臨床心理学科（t-nishim@he.hirokoku-u.ac.jp）

要　旨

本論文は，心理学における研究手法の一つである調査的面接技法について、心理学の研究法の初学者を対象に演習を行った際の手法や工夫した点、結果のまとめ方などについて取り上げた。調査的面接技法は、質問紙調査や実験的手法では得ることのできない、非言語的な対象者の反応や、時間的流れの中での反応を測定することのできる手法であり、卒業研究などにおいても取られうる手法として、心理学分野のみならず幅広く用いられるものである。本論文は特に、(1) 心理学の研究技法における面接法の位置づけ、(2) 今年度心理学演習で実施した調査的面接法実習の内容、およびそのノウハウ、(3) 演習において実際に学生が行った結果のまとめ、ならびに資料としてのプレゼンテーションの仕方、について、次年度以降学習する学生の手引きとなりうる形でまとめたものである。

1.　はじめに

心理学という学問領域が、哲学から派生する形でこの世に科学的側面を持つものとして誕生したのは、ドイツのウィルヘルム・ヴントがライプチッヒ大学に心理学実験室を開設した1879年である。それ以来120余年の間に、心理学の研究は急速に進歩し、多くの研究知見の蓄積が多くの研究者によって行われてきた。その中には、最先端の科学技術を用いて、脳の仕組みと意識状態の把握を行うようなものもある（詳細は藤原，2005を参照）。しかしながら、そのような最先端の技術だけが心理学のすべてではなく、素朴な疑問、関心から人のこころの把握を行い、こころの仕組みを明らかにしようとするのも心理学の一つの側面である。

例えば、我々は日常的に多くの人々と接し、様々なコミュニケーションを行う。その中には、試験における面接のような非常に公的なものから、親しい友人同士の秘密の会話のような非常に私的なものまで多種多様である。また、人間は言葉を介して他者と意思伝達を行うことができ、そのことによって社会性の発達を成し遂げていることを考えるならば、言語を介した様々なやりとりこそが、心理的な変化の表象を明らかにするために、非常に重要な要素であると考えることができる。また、コミュニケー

ションには言語的な要素のみならず、非言語的な要素も伴うことが重要である。Mehrabian and Wiener(1967)は感情の伝達において、言葉による感情表現と声による感情表現と顔による感情表現のそれぞれの寄与率を示している。その中で言葉による感情表現は全体の7%の寄与率しかなく、声による感情表現は38%、顔による感情表現は55%を占めている。また、コミュニケーションの分類においては、声の調子や間合いなどの準言語、身振り手振りなどの身体動作、対人距離などの空間行動も重要な位置づけを占める。

これらのことから考えると、他者の心理の理解、また心理状態の把握においては、言語およびそれに伴う非言語的要素を力動的に、また同時並行的に捉えることのできる手法を取る必要があると言える。そのための技法として、心理学の測定技法として、面接法が重視され、様々な発展を遂げている。特に、会話といった要素に着目した研究を行うためには、非常に重要な技法であると言える。これは、高度な研究技法で、ほんの一握りの研究者しか用いることのできない手法というわけではない。むしろ我々が日常的に行う活動である会話を中心にして行うために、実験法や質問紙調査法、観察法などの心理学的研究技法と比べると、非常に身近なものであると言えよう。そのため、学部生の卒業研究のレベルから取り入れることのできるものであると言えるが、身近すぎる故に我流になり、面接法という技法を用いて知ろうとする本質を見失うことも少なくない。そこで本論文では、心理学的研究技法の一環としての面接法の位置づけ、および面接技法の習得のための演習課題の内容とノウハウをまとめる。さらに2005年度の東亜大学総合人間・文化学部の心理学演習において、実際に学生が行った面接実習における記録の取り方、およびまとめ方などにも触れる。

2. 心理学的研究法としての面接法の位置づけ

面接とは「一定の場所において、人と人とが特定の目的をもって直接顔を合わせ、主として会話を通してその目的を達成しようとすることであり、目的によっては非言語的要素も加味される（小林，1999)」と定義される。面接によって、心理的な側面を追求しようとする最も一般的なものは、各種採用のための面接であると考えられる。具体的には、学校への入学試験の面接や、企業等への就職採用の面接などがある。これらは公的な場面で面接が使われる一例である。また、私的な場面での面接も、友人づくりのレクリエーション場面や異性との交際のためのお見合い、結婚の承諾を得るための両親との面談などといった場面で見受けられるものである。これら広範な場面での「面接」は、上述の定義に即して考えると妥当なものであるといえよう。

しかしながら、このような日常場面をそのまま心理学的な「研究」の俎上に載せることは容易ではない。学問の対象として、人間のこころを扱うためには、日常場面での面接などをさらに高度な形で洗練させた、「道具としての」技法的利用が重要である。

このような日常会話と心理学的な研究技法としての面接の違いについて、鈴木（2005）は5つの観点でまとめている。第1に、日常会話と違い面接では初対面の未知の人が対象となることが多く、限定された時間内でのコミュニケーションである。第2に、日常会話には人間関係の進展やストレス発散といった機能があるが、面接は情報収集や問題解決の手段として用いられる。第3に、日常会話では相手の表情や身振りなどをずっと注意深く観察しているわけではなく、また意図的に聞き流すこともあるが、面接では相手の話にきちんと耳を傾け、正確に記録を取り、記録の内容に分析および解釈を加えて、相手の考えや意見を客観的に理解しようとする。第4に、日常会話では聞き手と話し手の役割交換がほぼ無意識に自然に行われるが、面接では役割はほぼどちらか一方に固定されることが多い。第5に、日常会話の広がりは無限で話の流れは予測不可能であるのに対して、面接でははっきりとした問題意識、目的、形式を

もった質問がなされ、話題の広がりや話の流れは多かれ少なかれコントロールを受ける。

以上のことを踏まえると、「面接とは、会話によるコミュニケーションに明確な目的と構造（形式）と技法を備え、会話の参加者に面接者（聞き手）あるいは面接対象者（話し手）という固定的な役割を与えたもの（鈴木，2005）」であると言える。

この面接を用いた心理学的技法と、他の心理学の研究技法との相違点について、簡単に触れる。心理学の研究技法は、実験法、質問紙調査法、観察法、面接法の4種類に大別できる。

実験法は実験室などでの統制された環境下で、統制された刺激を呈示するといった手法を取る。また、実験刺激の呈示もコンピューターや精密機器を用いて行うことが多く、実験参加者の反応を言語的側面のみならず、生理的側面（脳波、心拍、血圧、発汗など）から捉えることができる。面接法は、面接に適した個室（実験室、面談室）などを用いて行うが、生理的側面の測定などを行うことはない。

質問紙調査法は、様々な手法があり、対面型の調査法もあるが、多くの場合用いられる集合調査法では、一度に多数のデータおよび資料を短時間で得ることができ、それらのデータに統計的手法を用いた分析を施すことで、データの特徴を客観的に分析し、その背後にある人間のこころの動きを幅広く捉えようとするものである。面接法では、質問紙調査法のように多数のデータを扱うというよりも、少ない対象に対して時間をかけて丁寧に接し、人間のこころの動きをより深いレベルで把握しようとするものである。

観察法は、人間の行動を観察、記録、分析し、行動の法則性や、行動の特徴を捉えようとするものである。観察法は言語的表出などが十分できない乳幼児をはじめあらゆる対象に対して行うことができるが、面接法では言語を媒介とするために、言語的能力をある程度有する世代を対象とする必要がある。さらに、観察法では、統制をかけた観察が可能であるが、面接法では相互作用によってその内容が変化する可能性があり、場面を客観的に統制することは容易ではない。

以上のことを踏まえ、面接法という研究技法を用いて心理学的な研究を行う際には、対象の言語能力、また状況的側面を十分考慮して行う必要がある。

3. 面接法の種類

心理学の技法としての面接は、面接の動機、目標などの違いから大きく2つに大別することができる（保坂，2000）。

一つは、量的・質的資料収集のための調査的面接法である。質問項目の構造の厳密さや明確さ、被面接者の語る内容の自由裁量度によって構造化面接、半構造化面接などに分けることができる。

もう一つは、心理的援助のための臨床的面接法（相談的面接法）であり、この中には査定面接と援助的面接という2つの側面がある。査定面接では査定に必要な項目が構造化されており、それについて被面接者に尋ねるといった手法を取る。援助的面接は、研究目標をあらかじめ設定し、それに向かって面接を行うのではなく、個々の事例に対して、問題解決という目標に向かって面接が行われる、介入的技法である。

一般に心理学的面接というと、後者の臨床的面接法がイメージされることが多いが、研究としての技法としては、あまり適切なものでない場合が多い。査定面接における基準の設定のために面接技法が研究として用いられることは、ロールシャッハテストなどに代表される心理検査などで見受けられる。しかしながら、援助的な面接に関する研究を行うことは、その技術修得の困難さ、被面接者に及ぼす影響の重大さ、また無資格の学生が行うことへの倫理的問題などから、少なくとも大学の学部生レベルでは不可能に近い。

そのため、心理学的な研究技法として面接技法を用いて、卒業研究などを行う際には、調査的面接技法が主となると言える。この調査的面

接技法は、発達心理学、認知心理学、社会心理学、産業組織心理学などの多くの心理学分野で活用されている。また、心理学のみならず、社会調査法の一種として社会学、行動科学、マーケティング、コミュニケーション学などの諸分野でも広範に利用されている。特に、近年心理学の研究手法において、質的心理学と称される、主観性や現象学的アプローチが着目されつつあり、質的な調査技法としての調査的面接技法への注目も高まっているといえる（鈴木, 2005)。

調査的面接法の利点として、鈴木（2005）は7つの要素を挙げている。第一の要素は確実性に関することで、被面接者の確認が可能なことや、被面接者と接触できればほぼ回答を得ることのできるための回収率の高さなどがある。第二の要素はコミュニケーションの正確性に関することで、現場での回答の確認や質問内容理解の確認、補足的説明の可能性などがある。第三の要素は応用性に関することで、他のデータ収集法との併用が可能なことや、仮説生成型、仮説検証型調査への利用のための予備的データ収集として位置づけることができる。第四の要素は臨機応変性・柔軟性に関することで、被面接者に対する対応を状況に応じて変化させることができ、質問内容もある程度操作することが可能である。第五の要素は包括性に関することで、被面接者の心理や調査テーマの全体像を包括的に把握しやすいことがある。特に非構造化面接の場合、被面接者の潜在意識や心理状態などを引き出すことも不可能ではない。第六の要素は自然さに関することで、非構造化面接の場合、被面接者の意識や思考の自然な流れを妨げずにデータ収集が可能となる。第七の要素は情報の多様性と豊かさであり、現実の主観的な意味づけの理解や微妙なニュアンスや含蓄の表現、幅広く深い内容の情報を得ることが可能である。

もちろん、被面接者や面接者の主観性の問題、言語の使用による調査の限界、結果の一般化や信頼性、妥当性の問題など、考慮すべき問題点もあるが、その点は他の技法も同様であり、適切な対象に適切な手段で用いることにより、これらの問題は解決されうるものであると言える（調査的面接法の限界についても、鈴木（2005）に詳細に記載されている)。

4. 面接の実施について

調査方法として、面接を行う場合、技術的な問題が伴う。このため、練習をする必要がある。それは、得られたデータが有効なものとして使えるかどうか、という問題につながり、そのためには、データがどのように生かされるのかについて、ある程度の理解が必要となる。

以下に、概略として、どのように面接を行うのか、そのように記録を取るのか、そして、どのようにデータを解釈するのか、簡単に触れておく。

4-1. 面接方法の概略

実際に卒業研究などで、面接法を行う準備・練習として、2005年度の総合人間・文化学部開講の心理学演習の中で模擬的な実習を行った。そこでのやり方としては、3人組で、役割を面接者と被面接者と観察者で交代して行った。これは、田畑(1982)がカウンセリングの練習として、ロールプレイングを行う際に採用している「同一のペア同志が役割を入れ替わることのないよう」に「3人一組になる」という工夫を転用した。この工夫によって、面接者として質問をして記録を取ること、被面接者の立場にもなって“訊かれる側”の体験を通して面接者が配慮すべきことを考えてみること、また、観察者としてノンバーバルな情報も含めて行動観察を行うことが容易になる。この3つの役割を演じることを実習の課題とした。

記録については、テープレコーダによる録音と筆記を併用した。記録用紙には、表1-1および表1-2の形式のA4版用紙を使用した。罫線の有無は、記録者の好みで使い分けてよいが、時間的流れの記述や絵的な記録を行う必要がある場合には、罫線なしのほうが使いやすい。なお、受講者の中には、カセットテープを操作し

表1-1　面接実習時の記録用紙（罫線なし）

（　枚中　枚目）

学籍番号:	氏名:
面接日時:	年　月　日（　時　分 ～　時　分）
面接場所:	

心理学演習1（面接法）記録用紙　形式い

表1-2　面接実習時の記録用紙（罫線あり）

（　枚中　枚目）

学籍番号:	氏名:
面接日時:	年　月　日（　時　分 ～　時　分）
面接場所:	

心理学演習1（面接法）記録用紙　形式ろ

たことがないという者がかなりの人数であった。この点については、教材として、ICレコーダーを準備するなど、教員側が配慮する必要があるかもしれない。

面接で尋ねる内容としては、今回は実際の調査面接ではなく、あくまでも摸擬的な実習であったため、比較的回答しやすい内容を選んだ。具体的には「大学の入学式の様子」について尋ねることを求めた。また、話題の展開や初めての実習という点を考慮して、時間の制限を設け、3分間の面接とした。

こうして、面接を行った後、逐語録（プロトコル）を作成させた。テープを繰り返し聴いて転記すること、面接時に筆記した面接内容と行動観察情報などを加えて、臨場感のあるプロトコルを作成させた。

技術的なことになるが、テープ起こしは労力を要する作業である。今回の面接実習では、3分間という短い面接の実施だったが、何度も聴き返して転記を行うため、この作業だけでも所要時間が1時間以上になってしまう。もし卒業研究などで、60分～90分～120分以上の面接調査を行った場合、プロトコルの作成だけでも、かなりの時間を要することになる。

4-2. 面接記録のまとめ方の一例

表2に、筆者の一人が実際に面接実習に参加して、面接者として行った記録から、その一部分についてまとめたプロトコルを、面接記録の仕方の一例として提示する。この資料では、面接を行うまでの流れ、面接の導入部、行動観察情報を簡潔にまとめた上で、プロトコルを作成した。必ずしも、この見出しに合わせる必要はないが、目安として適宜まとめることが望まれる。

表2　面接記録の例

ロールプレイを始めるまで

部屋の雰囲気は、教室で一斉にロールプレイを行っているため、落ち着いて面接を行うには騒がしい雰囲気であった。そのため、仕切りを設ける工夫がなされ、他の学生とのスペースを空けることができ、被面接者・面接者・観察者の3人でまとまりやすい雰囲気が次第に形成され、安心してロールプレイを行える空間ができたと感じられた。

受講生同士とはいえ、あまり面識をもっていなかったため、まず挨拶から入り、話しやすい雰囲気作りを行った。最初は、照れたような態度で緊張感があったが、しだいにうちとけて、ロールプレイの役割と順番について希望を述べていくと自然な流れで順番が決まった。本記録者は、最初にロールプレイを行い、面接者の役割となった。

ロールプレイの導入部

本記録者（以下、面接者：女子）は、被面接者（男子）と机をはさんで向き合って座る。観察者（男子）は、面接者の横に座り、目立たないようにうつむいたり、時々面接の様子をうかがうようにして静かに観察していた。

録音機材や筆記具などの確認して、あらかじめ決められていた「あなたの入学式の日の様子はどうでしたか？」というテーマに沿ってロールプレイを始めた。

行動観察情報

被面接者は、緊張した面持ちで、そわそわと足を小刻みに動かしたり、身に付けているネックレスをさわったりしていた。体勢は、前かがみで面接者の方に体を傾けているが、足元を見るように下を向いたり、目をほとんど合わせることがない。このような様子から緊張と不安が面接者に伝わってきた。声も少し震えていてはっきりとした口調ではなく、語尾がぼやけこもったような口調であった。

しかし、表情は、常に穏やかな笑顔で、目が合うと微笑み返すなどラポールは良好であった。こうした被面接者の様子から読み取れることとして“今からほとんど話したこともない面接者に、一体どんな内容の話を話せばよいのか、どんなことを訊かれるのか、緊張するし不安だし戸惑っている。そして恥ずかしいような、落ち着かないような、少しドキドキするような気分である”という印象が感じられた。

プロトコル（3分間の面接）

面1：大学の入学式の日の様子ということなんですけれども、思い浮かぶことをお話下さい。
被1：大学についてですか？（片手で顔をさする）
面2：入学式の…
被2：その当日は（考えこむ）…緊張…ですね。不安と期待とで…
面3：大学に対して不安や期待で緊張していたのですか。
被3：そう。…ですね。（沈黙5秒）
面4：具体的に言うと、緊張とはどのような気持ちでしたか？
被4：勉強とか、これから新しい環境にいくわけで。嬉しかったり、どきどきするような気持ちです。
面5：大学という新しい環境に、嬉しいようなどきどきするような気持ちだったんですね。
被5：はい。そうですね。（沈黙10秒）
面6：新しい環境に入って、どれくらい？　入学したのは何年前になりますか？
被6：…1年前…（首をかしげる）1年前…ですね。はい。ちょっと前。
面7：はい。では最近ですね。
被7：はい。そうですね。
面8：けっこう、鮮明に覚えてますか？
被8：いや、そうでもないですけど（笑）そこまでは。はい。
面9：その、例えば、入学式の時すぐお友達はできましたか？
被9：（勢いよく）いや、できないですね。はい。（顔を横に向ける）…人見知りが激しい。自分からはしゃべりかけるってことをしないんで。
面10：ああ…自分からは話しかけられない…
被10：はい…（沈黙5秒）
面11：こちらには1人で下宿されてるんですか？他に知り合いはいない？
被11：そうですね。
面12：そこから1人で来られて…
被12：はい。
面13：それまでにここに来られたことは？
被13：あのー、一回面接のときに来たので。
面14：そうですか。面接は試験ですか？
被14：…（小声で）何の面接ですかね。あれは。…（首をかしげる）AO入試の。…そうですね。
面15：それから入試でこちらに来られた…久々でしたかこちらに来られたのは。
被15：いや。もうAO入試の締め切り間近だったんで。そんなに日は経ってなかったんで。大丈夫でした。
面16：では、少し慣れていたと…
被16：そうですね。もう面接のときにけっこう迷ったので。（笑）
面17：そうですか…
（3分経過、担当教員から終了が告げられた）

（註）表中の（面）は面接者の発言、（被）は被面接者の発言を表す

4-3. プロトコル作成の概略、要点

プロトコル（発話記録）は、面接時に筆記を行うこと、また面接後にテープを聞き取って転記することによって作成される。その際に、考えておかなければならないことがある。それは、例えば表2に示したように、面接でのやりとりにおける被面接者の発言として、「被1：ダイガクニツイテデスカ？」とただ音声が書き取られるのではなく、「被1：大学についてですか？」と語られた内容が面接者によって理解される必要がある。なおかつ、行動観察情報で（片手で顔をさする）ということが付記されて、その結果、“模擬面接・実習で実際に被面接者体験をして緊張している様子、あるいは、問われた内容に関する当惑などを伴って、片手で顔をさすりながら、面接者の問いかけを疑問形で繰り返す”という様子が、書かれた記録から伝わるようにプロトコルを作成しなければならない。

4-4. 行動の記録の要点

このように、面接法では、被面接者の発話だけでなく行動観察を行うことが重要になる。この点については、内田(2004)が臨床心理学的援助における面接で留意すべき点について述べている。それは、面接という設定・状況下において、被面接者の態度を丁寧に検討し、外面に現れてきた態度・様子・表情などから、被面接者の心理的・内面的な理解を進めることにつながるということである。それ故に、被面接者の様子をどのように捉えるのか、必要な情報を取捨選択することについては、面接者のセンスや解釈に関するスキーマの醸成が重要となる。この点は、経験者からの指導を受けながら、学んでいくことが効率的である。

5. プロトコルの活用

実際の研究においては、プロトコルを作成することで、作業が終わったわけではない。質的、および量的データとしてプロトコルを活用し考察するためには、より詳細な解釈を進めなければならない。

5-1. プロトコルの通読

プロトコルを適切に解釈するためには、作成されたプロトコルをまず「通読する」ことが必要となる。通読する際の注意点としては、面接においてどのようなやり取りがなされたか、その流れ・文脈を理解しなければならない。

なお、具体的な手順としては、最初の通読に際しては、集中してただ黙読・音読することに徹し、文脈・文意・流れを理解したところで、次に、赤ペンやラインマーカーを使って気になる箇所に下線を付す作業に移るとよい。

こうして下線を付された箇所の発言・語句がキーワードとして認識され、より文脈が理解できる。そこから、被面接者の個性記述へとつながっていくことになる。

5-2. プロトコルデータ（言語データ）の処理について

また、面接法で得られたプロトコルがそのままデータになる場合もあるが、抜粋や要約を行う必要が出てくる。卒業論文や修士論文でプロトコルをそのまま収録する人があるが、これは、そのプロトコルから重要な記述を読み取れなかったことに由来する場合がある。いわば、質問紙調査において、データを記述統計で示すのではなく、評定済みの質問紙をそのままとじこんで収録したのと同じだという穿った見方さえできる。

そこで、簡潔に要点を挙げながら、被面接者の様子を描き出すことを目標として、言語データの取捨選択を行わなければならない。

5-3. 質的データの統計的処理

面接法で得られた言語データをどのように統計処理するかという問題についても簡単に触れておく。質問紙法の場合、得られたデータが順序尺度水準のデータであるので、数量として統計処理が行いやすい。これに対して、質的データは統計的処理に乗りにくいという性質がある。

しかしながら、プロトコルの中に現れたキーワードを選定したり、行動観察上の特徴に着目したりすることで、何らかの指標を設定することができる。こうして、その指標に該当した回数や個数を数えることで、名義尺度水準のデータが得られ、χ^2 検定などのノンパラメトリックな検定を行うこともできる。これらの検定法についても、学習しておく必要があり、SPSSなどの統計ソフトの操作についても学習しておくことが望ましい。

5-4. 面接データの発展と展開

面接で得られたデータは、その後の研究に展開させることもできる。一例として、面接法を予備調査として行い、得られたデータから質問項目を収集し、質問紙を作成する場合を挙げることができる。

この点については、田中(1990)が質問紙法の成立の歴史を述べる中で、大人数に対して医師による問診を行うことが困難なために、問診に変わるものとして自己評定による質問紙法が成立してきたことを指摘している。

このように、面接データから重要な記述を拾い出し、それを基にして5件法ないし7件法の尺度を構成し、多くの協力者・対象者に対して評定を求め、平均値（標準偏差）や相関係数を算出した上で、因子分析を行って、尺度作成と標準化を行うことができる。このようなやり方からは、質問紙法による法則定立的な検討に展開させることが可能である。

また、面接を実施した後、重要な記述を拾い出した後、KJ法による分類で、面接データをまとめることもできる（KJ法については、川喜多(1967)を参照されたい)。

6. まとめ

本論文では、心理学的研究技法としての面接技法について、その意義と重要性、また実際に初学者の学生が修得する際に留意すべき点をまとめた。実際の卒業研究などで、質問紙調査や実験など他の方法で調査・研究を行うことになったとしても、調査法の1つとして、身につけておくことが望ましい。それは、ここで示したように、記録を取ることは、レポートや論文をまとめる準備につながることとして、強調しておきたい。

面接技法は、言語に依存する部分が非常に高く、また非言語的要素の解読のスキルも重要な要素となる。これらは一朝一夕に修得できるものではない。日常生活において、「ことば」に敏感になり、また他者との関わり合いを大切にすることが、言語的、非言語的な理解につながると考える。調査的面接の技法を習得することは、卒業研究などでの技術面の修得のみならず、この手法を学び、修得した者の社会的スキルの向上にも寄与すると言える。表層的な「ことば」のやりとりだけでなく、その発言の真意や心理的な変化に気づき、まとめていく過程は、社会に出てからの実生活でも十分活用できることである。

なお、調査的面接法を、卒業研究など、調査・研究と関連づけて論じたが、大学院で臨床心理学を専攻する前段階の学部レベルで経験しておくことはその後の臨床心理士になるための基礎教育として、もっと重視されてもよいだろう。

他の心理学的研究技法と同様に、調査的な面接技法を多くの学生が習得することが、心理学の教育と研究において重要な意味を持つと考える。特に他者との関わりを実体験として得ることのできる面接法は、「こころ」の理解にとって意味あることであるといえる。しかしながら、実施の際にはきちんとした手順を踏み、他の研究手法同様真摯な態度で臨むべきである。

引用文献

藤原裕弥　2005　心理学における意識と脳の科学的研究　総合人間科学（東亜大学総合人間・文化学部），5，11-18.

保坂　亨　2000　人間行動の理解と面接法　保坂亨・中澤　潤・大野木裕明（編著）　心理学マニュアル面接法　北大路書房　Pp.1-8.

川喜多二郎　1967　発想法：創造性開発のために．中公新書．
小林正之　1999　面接　中島義明（代表編集）心理学事典　有斐閣　Pp83-4.
Mehrabian, A & Wiener, M. 1967 Deoding of inconsistent communications. *Journal of Personality And Social Psychology*, 6,108-118.
鈴木淳子　2005　調査的面接の技法（第２版）ナカニシヤ出版
田畑治　1982　カウンセリング実習入門．新曜社．
田中富士夫　1990　質問紙法．土居健郎・笠原嘉・宮本忠雄・木村敏編　異常心理学講座第８巻　テストと診断．みすず書房．17-70.
内田裕之　2004　行動観察による理解．小林芳郎編著　精神保健の理論と実際．保育出版社．47-51.